

# ヴォーリーズが手掛けた駒井家住宅の特性について

二宮 結衣

(丸田 博之ゼミ)

## 目次

はじめに

第一章 ヴォーリーズの生涯と音楽の関係性

1.1 ヴォーリーズの米国での生活と日本来日後の活動

1.2 ヴォーリーズと音楽

第二章 駒井家住宅

第三章 ヴォーリーズが設計したその他の作品

第四章 駒井家住宅設計に込められたもの

引用及び参考文献

## はじめに

現在日本には多くの近代建築が存在している。その中で本稿において取り上げるのは建築家のウィリアム・メレル・ヴォーリーズ (1880～1964) である。ヴォーリーズはアメリカ合衆国で育ち、大学卒業後は日本に来日し、キリスト教伝道の他にも日本で数多くの西洋建築を手懸けた建築家で滋賀県の近江八幡を中心に近畿地方で広く知られている。京都市内にもヴォーリーズが手掛けた建築物を私たちは街中を歩く際に目にしている。

例えば、京都市下京区の四条大橋西詰南側に位置している北京料理店・東華菜館はヴォーリーズが設計した生涯唯一のレストラン建築である。他にも京都市上京区に位置している同志社大学アーモスト館、京都市北区にある京都復活教会など、学校や教会の建築も手掛けている。中でも筆者が興味を持ったのが、京都市左京区北白川にある洋風住宅・駒井家住宅である。駒井家住宅は遺伝学者であった駒井卓博士の住宅で1927(昭和2)年に建てられた。1998(平成10)年3月に京都市指定有形文化財に指定され、その地域を中心に多くの訪問客を現在に至って迎えている。2002(平成14)年に所有者は公益財団法人日本ナシヨナ

ルトラストに寄付されたことで、トラストの資産として保存維持に努め、「駒井家住宅」として公開活用されている<sup>1</sup>。昭和初期に建てられた駒井家住宅はなぜ現在も保護、継承されているのだろうか。ヴォーリーズが円熟期にさしかかった大正末から昭和初期に形成された駒井家住宅は、彼が手掛けた個人住宅ならではの特性が顕著であり、ヴォーリーズの個人住宅に対する想いが込められている代表作であることがその要因であると筆者は考えている。そこで本稿では、駒井家住宅が出来るまでヴォーリーズの歩んできた道程を探ることとし、駒井家住宅はもちろんのこと、他に個人住宅以外のヴォーリーズが手掛けた建築物を分析し、駒井家住宅ならではの特性について検討していきたいと思う。

## 第一章 ヴォーリーズの生涯と音楽との関係性

### 1.1 ヴォーリーズの米国での生活と来日後の活動

まずヴォーリーズの略歴と建築活動について述べていく。

ヴォーリーズは1880(明治13)年10月28日に米国カンザス州レブンワースに生まれた。6歳の時にアリゾナ州フラッグスタッフに転居して成長し、その後はコロラド・カレッジ哲学科に進んで1904(明治37)年に卒業した。在学中のYMCA活動を通してキリスト教の海外宣教活動を志し、YMCAのルートにより「青年会英語教師」として1905(明治38)年1月29日に来日し、滋賀県の商業学校に赴任している。教員時代は2年で終わるが、その間に多くの教え子を育て、独力で八幡YMCA会館を建てた。その後1908(明治41)年、京都YMCA会館の支援者の紹介で京都YMCA会館の建築工事の代理監督に就き、ここで建築設

## ヴォーリーズが手掛けた駒井家住宅の特性について

計監督事務所を始めた。1910（明治43）年には、支援者を求めて欧米をめぐり、米国人建築技師チェーピンを伴い近江八幡に戻り、ヴォーリーズ合名会社を設立した。

以後のヴォーリーズの活動は多岐にわたり、近江八幡に拠点を置いて、YMCA をモデルとした伝道活動とともに建築設計を始め、著名な塗り薬メンソレータムや米国製ピアノなどの販売事業を促進し、やがて大阪、東京に支所を置くヴォーリーズ建築事務所を開設した。建築活動は北米ミッションのキリスト教関係者の知己を得て、各地のキリスト教会堂やミッション・スクール、宣教師住宅を建て、米国の伝統的住宅スタイルを応用した数多くの住宅設計を行い、日本住宅の洋風化に多大の影響を与えた。著名なところでは、大同生命ビル、百貨店の大丸心齋橋店や大丸京都店、主婦の友社ビルなどが残されている<sup>2</sup>。

ヴォーリーズの建築活動は教員時代の1907（明治40）年に建てた八幡YMCA 会館をはじめ、近江ミッションという独自のキリスト教活動とともに、上にも述べたように組織としては1908（明治41）年の建築設計監督事務所の開設、1910（明治43）年のヴォーリーズ合名会社、1920（大正9）年のヴォーリーズ建築事務所の設立へと発展していく。この事務所は、英語科教員時代の教え子である吉田悦蔵、村田幸一郎の3名による匿名組合として設立された。1925（大正14）年には佐藤久勝、小川祐三、宮本文次郎、浪川岩次郎の4名を組合員に加えて組織が確立されている<sup>3</sup>。

また医療活動にも取り組み、清友会幼稚園をはじめ、後の近江兄弟社学園につながる学校経営にも乗り出している。一柳末徳子爵の令嬢満喜子氏との結婚後、日米関係が悪化していく中、日本国籍を取得して日本に留まることを決意し、一柳米来留と改名して日本に帰化した。第二次世界大戦中は事業の中止を余儀なくされ、軽井沢に滞在しながら東京帝国大学で英文学特に英詩を講ずる職を得た。戦後は近江兄弟社の事業を再開し、1964（昭和39）年、日本においてその生涯を終えた<sup>4</sup>。

このように戦争が悪化していく中でヴォーリーズは日本に留まり活動を続け、生涯にわたって日本におけるキリスト教の伝道活動や建築・音楽活動に貢献してきた。なお、余談であるが、ヴォー

リーズは戦後、昭和天皇とGHQ マッカーサー元帥との会見の仕掛け人とも言われている。彼の非凡さが伺えるエピソードである。

次の節では、ヴォーリーズの生涯において欠かせないものとなる音楽とその設計への影響などについて記す。

## 1.2 ヴォーリーズと音楽

ヴォーリーズが設計した住宅には、居間の調度品としてピアノが置かれている。その背景は、ヴォーリーズの生い立ちと関係しているとされている。ヴォーリーズは幼い頃、虚弱体質で幼少年期に腸結核を患い、長期の治療を受けていた経験がある。ヴォーリーズ自身が綴った『失敗者の自叙伝』には、

七歳か十四歳になれば、病気が再発するおそれがあるとの、医師の警告のせいもあったであろうが、虚弱な幼少年期も過ぎて十四歳になるまでは、世話のやける子どもであった。その結果、自分では何もせず、いつも周囲の人々から世話をしてもらうことを期待するようになった。こうして不精・遅鈍・怠惰などの悪癖が、第二の天性となり、生涯のハンディキャップとなったのである。しかし、これらの悪条件に対し唯一の代償となったものは音楽であった。（一柳1980、p.12）

と記されているように幼少期からヴォーリーズの身近に音楽があり、体の弱い彼の心の拠り所となっていた。音楽に興味を持ったきっかけは、従姉が当時、毎日5、6時間ピアノの前に座り、一生懸命に練習をしていたことである。家族はヴォーリーズを大人しくさせておくには従姉がピアノを弾いている隣に座らせるのが最も有効だと発見した。その結果としてヴォーリーズの生活に音楽が浸透していったのである。ちなみに従姉が弾いていた曲目のなかでは、メンデルスゾーンの楽曲を最も愛好していたとのことである。

ヴォーリーズの音楽に関する経験はもうひとつ挙げられる。ヴォーリーズが4歳の時、父母、弟と教会の日曜礼拝へ行き、初めてパイプオルガンと聖歌隊の合唱を聞いた。オルガニストは従姉の

ピアノの先生であった。当時幼いヴォーリーズには、説教や聖歌隊の歌の内容は理解できなかったが、その日以来、音楽はヴォーリーズにとって自己表現の有効な手段となった。そしてやがて教会に出席することは習慣となった。12歳を過ぎると、将来音楽家になることを夢見るが、激しい音楽の練習に明け暮れる気持ちは毛頭なく、それでも1時間ほどは真剣に演奏と練習を繰り返していた。その後は好みのメンデルスゾーンを彷彿とさせるピアノ曲に没頭し、音楽に浸る時間を有した。ピアノの技術はそれほど進歩しなかったが、教会音楽の主たる楽器であるオルガンも弾いてみたいと思うようになり、大学時代には実際にパイプオルガンの弾く機会を得た。というのも、音楽部の部長が多忙かつ讚美歌を弾くのがあまり好きではなかったことから、彼は自分の代わりに弾ける者を探していた。偶然ヴォーリーズの友人に他の教授の息子がおり、その友人が部長にヴォーリーズがかつて郷里の教会でオルガニストをしていたことを話した。その結果ヴォーリーズは部長から週2回のオルガン演奏を要請され、ヴォーリーズはオルガンを弾けば報酬がもらえることよりも、オルガンを弾けることそのもの、またいくらでも好きな時に練習ができることへの喜びが強く演奏を引き受けた。長い間夢見たパイプオルガンの演奏が叶い、『失敗者の自叙伝』にも、

私が、それほどオルガンを愛さなかったならば、ファイ・ベタ・カッパ章 Phi Beta Kappa key [注 米国大学優等卒業生に授けらるる記章] がもたらされたかもしれない。しかし、もう一度大学時代を繰り返すことが許されたとしても、私はやはりオルガンの鍵の方を選ぶだろうと思う。(一柳 1980, p.43)

と綴られていることから、幼少期からの音楽に対する強い想いが大人になっても続いていることが分かる。ヴォーリーズは幼い頃に病弱でありながらも常に自分の好きな音楽と共に生涯を歩んできたのである。そこで次の章では本稿の主軸となるヴォーリーズが設計した駒井家住宅に与えた音楽の影響について述べることにする。

## 第二章 駒井家住宅

まず、この住宅の概要について述べることにする。

京都市左京区北白川に建つ駒井家住宅はヴォーリーズの円熟期の代表的な住宅建築として評価が高く、1998(平成12)年に京都市指定有形文化財に指定された。遺伝学者であった京都大学教授駒井卓博士(1886～1972)と静江夫人(1890～1973)の遺邸で1927(昭和2)年に建てられた。琵琶湖疎水に沿う小径に面して建ち、背景には比叡山麓の大文字山を間近に見る静かな環境にある。西側の道に面して門が配され、およそ30メートル四方の敷地の西側に本宅が建っている。庭園は比叡山を借景としており、一角には駒井博士必須の研究施設である温室が置かれている。当時米国で流行していたスパニッシュ様式をベースにし、赤い和瓦を使用している<sup>5</sup>。筆者は数回駒井家住宅を訪れ、ヴォーリーズが駒井家住宅を設計する際に手掛けた工夫や設備の特徴を視察した。主屋の1階は居間を中心として、北側に食堂、台所があり、南側にサンルーム、西側には和室が置かれ、2階には2つの寝室と書斎などが配置されている。

ヴォーリーズの設計は見た目の美しさだけではなく、実用性が重視されており、駒井家住宅も至る所にヴォーリーズの心遣いが感じられる。玄関に入って右手にはこの住宅の特色の一つである和室がある。窓は両側とも出窓で内側に障子を入れているため、外からは完全に洋館に見えるようになっている。また「玄関に入って左のホールの一角にはコの字型の階段がある。2階までの階高は低く、階段の段差は通常よりも緩やかになっている<sup>6</sup>。」静江夫人が日常生活で着物を着用していたため、緩やかな階段にすることで上り下りのしやすさに配慮されていたと考えられる。筆者も駒井家住宅を訪れたとき、階段の上り下りのしやすさを実感した。階高が低いいため段数が多くても疲労感を感じないことを再確認した。階段室にあるステンドグラスはゴールドでヴォーリーズが好んだ色だと言われている。夕方になると階段室一体が金色に染まり美しい空間になる。居間は東の庭に面しており、南側にあるサンルームと合わせて自然光を十分取り入れることができる。また東側

## ヴォーリーズが手掛けた駒井家住宅の特性について



図1 駒井家住宅の居間  
(駒井家住宅・筆者撮影)



図2 駒井家住宅の階段  
(駒井家住宅パンフレットから引用)

にある固定されたソファの下に収納庫が設けられている。この居間にドイツのリトミューラー製のピアノが置かれており、結婚時に卓博士が静江夫人に贈ったものと伝わっている<sup>7</sup>。これについては後述する。ソファの横にある本棚は静江夫人が外国のカatalogをもとに取り寄せ購入したものである。居間の南側にあるサンルームのアーチ型の三連の窓はスパニッシュ様式である。サンルームは庭園から直接入ることもできる。この建物の扉のノブには紫色の水晶が使われているのであるが、紫色は比較的公的な箇所に、無色はプライベートの空間にと用途によって色分けされているようだ。

食堂と居間の間には折戸式の仕切りがあり、居間と同時に使用することもまた別々に使用することもできる。台所のシンクやガス台は、卓博士・静江夫人が他界した後、企業の保養所や研修所に使用された際に改変されたが、食器棚や戸棚などは当初のままである。台所の壁のペンキはできるだけ淡い色や黄色、真白がヴォーリーズ自身良しとした。それは汚れたときに目立つ色だからだそうである。そうすることで自然と掃除をするようになり、衛生面にも良いだけでなく淡い色は気持ち明るく、軽快になることに寄与していた。食堂からは、煉瓦を敷きつめたテラスの向こうに明

るい庭が広がり、左手には駒井博士が研究用に設けた大きな温室が見える。駒井卓博士は、米国留学の帰路に尊敬していたあの進化論で有名なチャールズ・ダーウィンの旧邸を静江夫人と訪れている。そこには大きな温室があり、ダーウィンの『種の起源』を著すための重要な実験が行われていた場所だった。駒井家住宅は静江夫人の意向が強く反映された建物であると考えられるが、そのなかにあつて温室はダーウィン旧邸にあつたものを、帰国後に新築する自邸にも設置したいという卓博士の強い希望があつた数少ない遺構のひとつと言われている。

駒井卓博士の音楽との出会いは、1920（大正9）年に京都帝大理学部講師として着任したのち、1923（大正12）年より2年にわたり静江夫人を伴って欧米に留学し、ニューヨーク市のコロンビア大学で学んでいたときである。そのニューヨーク時代に夫妻は米国生活と音楽に親しんでいたと言われている<sup>8</sup>。斎藤紀子氏によれば

駒井卓に1922（大正11）年に嫁いだ青野静江は、香川県丸亀の旧家の出身で、松山女学校卒業後は神戸女学院に進学した。神戸女学院には音楽部もあつたが、普通科・専門部を

卒業した静江ではあったが学校行事でピアノ演奏を披露する機会があり、同窓会報誌『めぐみ』によれば、卒業式で姉の光江が弾くオルガンに合わせてピアノを弾いていたことや慈善音楽会で教員と二重奏をしたことが記されている<sup>9</sup>。

駒井卓、静江夫人が自宅の設計をヴォーリーズ建築事務所に依頼をしたのは静江夫人とヴォーリーズ夫人の間に繋がりがあったからだと思われる。というのも静江夫人は神戸女学院で学んでいた際、ヴォーリーズの妻となる一柳満喜子と同窓生だった。後に静江夫人とヴォーリーズ夫人はキリスト教婦人矯風会の活動に積極的に取り組み、クリスチャンとしての交流があったと考えられている<sup>10</sup>。

ヴォーリーズは住宅を設計する際、居間にはピアノの必要性をあらかじめ感じていた。駒井家の居間に備えられたピアノで実践された音楽は、斎藤紀子氏によれば、「ドイツ由来の『家庭音楽』のように音楽振興を第一目的とせず、洋服・洋食・洋風住宅なども含め、より大きな洋風文化の中に位置づけられている。」とのことであり、また同氏の同論考には

駒井卓は「京大のダーウィン」の異名をとり、コロンビア大学の研究所に在籍した経験もある生物学者であったが、禁酒・禁煙に努め、結婚するまで女学校で音楽を教えていた静江夫人にピアノを弾いてもらうことをくつろぎの時間をしていた（執筆者不明1971）。（斎藤 2018、p.13）

とあるように居間に備えられたピアノは駒井夫妻にとって音楽という重要な日常を楽しむための必需品になっていた。駒井家住宅に備えられたこのピアノこそ、ヴォーリーズの設計の特徴であると言ってよかろう。家庭内に音楽を囲むひと時をもちたらしめることを目的とし、その意味で家庭内におけるピアノの実用性に重きを置いていたとも言えよう。またこの点をとっても、「居間」に備える調度品としてピアノを想定していたヴォーリーズは、同時に「居間」の設計そのものに強い思い入

れがあったことが分かる。

ヴォーリーズ自身が著した『吾家の設備』には、居間を設計する際の彼の考えが記されている。ヴォーリーズは、居間に最も必要な要素を「安楽」としていたようである。西洋館の居間には必ず暖炉があり、暖炉の両端には長椅子か安楽椅子が並べられ、長椅子の後ろには長いテーブルが置かれるのが常であるようだ。また部屋が広いのであれば1つ2つの趣味がその中心にあると考え、その1つは本棚であるとした。「その日その日の必要な書物や好んで読んでいる本を置き、本棚の脇には安楽椅子や小さいテーブル及び小さいデスクが1つの集団として準備されると、自然に趣味の中心が形づくられる」とヴォーリーズは考えた。居間の中に趣味の中心のグループを作り、その家具を集めることでその部屋の値打ちが現れ、家具の持ち主の人格や個性も表現されると考えたのである<sup>11</sup>。したがって、駒井家住宅の居間にはヴォーリーズが家庭内に音楽を囲むひと時をもちたらしめたいという想いを実現するために、駒井夫妻が好んでいた音楽を楽しめるようなピアノを配し、1つの趣味の中心としたと考えられる。また小さい本棚と安楽の椅子、机を置くことでもう1つ趣味の中心を作成し、夫婦が落ち着いて暮らせるような空間を実現させた。

「居間」に続いて重要な駒井家住宅の特長は、2階建ての構造になっている点である。

現代ではもとより珍しくない2階建てであるが、それはヴォーリーズが日本を訪れた際に感じた当時の日本の住宅に対する不満からこのような構造になったと考えられる。上述『吾家の設計』によると、ヴォーリーズが日本に来て関西に家を探した時、周囲は平屋ばかりで2階屋は1つもなかった。ヴォーリーズは経済面だけではなく健康の問題においても、2階が必要だと考えていたのである。日本の子どもが赤ちゃんのうちに2割が亡くなり、5歳未満の間に4割も亡くなるということは子供に対する設備がないか、あったとしてもそれは間違った設備であったことが原因であると彼は考察した。

すなわち1階は比較的湿気があり、空気が悪く、雑菌が入っているためそのような不潔で不衛生なところに赤ちゃんを寝かすのは根本的に間違っ

### ヴォーリーズが手掛けた駒井家住宅の特性について

いると考えたのである。その分野の専門家によると「雑菌というのは風の工合によって多少は異なるが平均地面から7尺ぐらいの高さまで上がる。普通の日本家の床は地面1尺5寸、少し立派な家で2尺ほどの高さしかないため、雑菌や塵埃が溜まりやすい場所で赤ちゃんを寝かしてしまうことになる。」とのこと。実際ヴォーリーズが日本の家に住んでいたころ、2、3か月経たないうちに本にカビが生え、掃除をしてもほとんどが駄目になってしまったという。その後、住宅を設計する際に2階建ての家を造り、書斎を2階にして大切な本も2階へ持って行くようにした。その家が建ってから16年経ったが本には全くカビが付かなかった。ヴォーリーズは、この出来事を通して本は中が紙だが、自分たちの身体や子どもの身体にカビが付くことや大切な子どもを湿気の中に放っておくことには恐怖さえ感じたのではあるまいか。よって2階の必要はただ高い家を建てて立派な家を持っているというような表面的な理由ではなく、健康のために大きな理由だったのである。

また、この2階建てを実現するために、その背景となる経済面にも注力した。すなわちヴォーリーズは平屋を建てるお金があれば2階を設備する工夫をするようにしたのである。日本式の2階を造り、子どもをそこに寝かすとなると、お風呂場もトイレも下にあり、ほとんどの設備が下にあるので階段の上り下りに不便を感じることや冬になった時寒さで子どもが風邪をひかないか不安に思う点もある。しかし西洋館はお風呂もトイレもたいてい2階に付いている。そして2階、3階を造るとなると階段が必要になる。押入れの中に作られた急勾配で幅も狭く、上がるにも下りるにも真っ暗なかつての日本の階段ではなく、明るく、そして楽に小さな子どもでも上がれるように造る必要があると考えたのである。

部屋の設備においても大きな部屋を造ってそこで食事、勉強、就寝、さらに客間の役割を一間で全て賄おうとすると不便が生じる。そこで寝室を全く別に2階に造り、小さくても書斎を別しておくことにしたのである。仮に日本家屋における立派な天井や床の間、違い棚が設備できるならば、そのお金で西洋館の2間、3間を造ることができると考え、また2間、3間を造る金銭的余裕があ

れば、2階建ての立派な家を建てることできるとも考えたのである。同じお金で便利な心地のいい設備を造るためには、まず経済面を考慮し、そこから大きな目的である健康面に配慮された住宅の実現を考えたのである。<sup>12</sup>

このようにヴォーリーズは来日してから日本の家屋の設計観を見直しており、それを反映して駒井家住宅には西洋式の建築を取り入れた箇所が数多くみられる。2階には客室、寝室、書斎があり、夫妻が生活する空間とお客さんを案内する部屋を分ける造りになっている。客室の入口の真横にある歯車を動かすと、天井から屋根裏に上がるための昇降式階段が下りてくる。屋根裏は大きな荷物を置く収納庫として利用されており、家の中の空間を収納スペースに活用するヴォーリーズの工夫がみられる。上述のように、2階に書斎が作られたのはヴォーリーズの過去の経験から書籍の劣化を防ぐためだと考えられる。書斎にある机は西側に面している。そして机がある西側に窓が取り付けられている。ヴォーリーズは住宅を設計する際に、書斎はその窓からできるだけ外の良い景色が見えるようにしていた。その目的は、本を読むときに、時々疲れた眼の焦点を取り換え、遠方の景色によって疲れをとるためであったという。その景色を見るため、または静かな場所で読書をするために書斎は2階が適していると考えた<sup>13</sup>。

なお、駒井家住宅には2階の書斎以外にも1階のサンルームから庭園を眺めたりベランダから大文字山を望むなど家の中から季節を感じることができる設計になっている。また夫妻には子どもがいなかったが、西洋建築と同様に2階にもトイレと洗面室を設けることで、階段の上り下りを減らし、暮らしやすい生活が実現された。

このように駒井家住宅はヴォーリーズがこれまでの経験から導き出された建築コンセプトを、駒井夫妻の要望に沿いながら、「音楽」という新しい日常のグループ、さらに「健康」という具体的な要素を主にして設計されたのであった。

次の章では、駒井家住宅にたどり着くまでの現在も残されているヴォーリーズの他の作品について述べることにする。

### 第三章 ヴォーリーズが設計した その他の作品

ヴォーリーズが設計した建物は、駒井家住宅をはじめとする個人住宅はむしろまれで、大丸百貨店などの商業施設、同志社大学アーモスト館、平安女学院などの学校建築と数多い。

なかで、東華菜館は、四条大橋の西詰に建つスパニッシュ・バロックの黄褐色の洋館でヴォーリーズ生涯唯一のレストラン建築である。鴨川越しにみるとモザイク・タイル張りのドームを持つ塔があり、中には高架水槽とエレベーター機械が納まっている。一般的に控えめにデザインする部分を東華菜館のシンボルとしてデザインされていることが斬新だと言われている。外観はスパニッシュの中でも華麗な装飾性を見せる様式・チュリゲレスク（スペイン・バロック）と呼ばれるものである。それは「装飾図柄を密に集めた点が特徴的で、シンプルな直線と美しい曲線を組み合わせた外観に玄関ファサードの羊頭、魚やホタテ貝、野菜の類、タコなど個性的な装飾がされており料理店らしく、食材をモチーフにしユニークな印象を与える」と評されている。このような食材の建築への反映は館内各所に散見することができる。館内は外観からイメージされるスパニッシュ・スタイルに加えて、「幾何学模様を重ねたチャイニーズ式や梁を支持するブラケットの曲線のネオ・ルネサンス式などが混入された折衷式のインテリア」とされ、ヴォーリーズが京の老舗の東洋料理店のイメージとして西洋風を折衷したように感じられる。また館内には1階から5階まで各階ごとに異なる趣向が凝らされている。1階はホールおよびカフェテリアとし、加えて鴨川の河原に張り出すいわゆる「床」が建築と一体化して設けられ、全体的に八芒星をモチーフにしたデザインとなっている。またレセプション、バーカウンター、待合室があり、床や窓枠、柱や天井の細部まで美しい装飾が施されている。2階は人数に合わせて選べる個室となっており、ヴォーリーズ設計の家具が今でも使われている。一角にあるステンドグラスの中心には八芒星の幾何学模様が所々にある。3階は中宴会場で天井や梁にイスラム風の装飾が

施されている。階段ホールに続いて喫煙室が設けられている。4階は大宴会場で1階とともに最もインテリアに力が注がれたところである。「東山を仰ぐ眼望を生かすため、装飾的なガラスの欄間を組み入れた開口部」が設けられ、窓から光が入り明るい空間になっている。この窓からは鴨川を挟んだ南座の大屋根と祇園の弥栄会館の高屋根が見え、京都ならではの景観を楽しむことができる<sup>14</sup>。

また当館で著名なのは、レトロな扉が開閉するエレベーターである。1924（大正13）年に製造されたアメリカ・オーチス社製で、現役で活躍する手動式の中では日本最古である。「運転手の誘導にゆだねて機械が立てる音を聞きながら上へ上がり、ゆっくり開いた扉から一歩進むと時空を超えて大正時代に運ばれたかのような感覚になる」<sup>15</sup>。東華菜館は個人住宅のようなシンプルなデザインとは異なり、料理店をモチーフにした装飾や訪問客の期待を裏切らない意匠を纏った豪華な空間である。また先ほども触れた建物の象徴であるルーフトップの塔はエレベーターのマシナールームになっている。これは「スパニッシュを基調とし、素焼きの彫刻であるテラコッタの装飾が施された外観と、内部のルネサンス風や幾何学模様を重ねたイスラム的な装飾に調和している」<sup>16</sup>。このように東華菜館の設計においてはヴォーリーズ建築の特徴である、「周囲の環境に調和するデザイン」が随所に表れている。東華菜館を訪れる人の中には、料理を楽しむためだけではなく、ヴォーリーズが手掛けた装飾や昔の時代にタイムスリップしたような空間を楽しみたい理由で訪れている人も多い。何十年もの時を経て多くの訪問客から愛されている料理店は四条大橋付近の1つのシンボルとなり、京都の歴史ある風景と調和して街並みを形成している。

次に、ヴォーリーズがアマチュア建築師として設計した頃の代表的な教会に、1909（明治42）年に建てられた大阪の福島教会、1910（明治43）年に建てられた京都丸太町教会がある。続く1913（大正2）年に建てられた京都御幸町教会と洛陽教会は合名会社創設期の作品に位置づけられている。大阪福島教会は「ツタが絡まる赤煉瓦の壁にスレート葺きの屋根が緑に塗られた切妻破風の装飾的な表現」を持ち、北米式のローカルな建築のよ

ヴォーリーズが手掛けた駒井家住宅の特性について

うだとされている。一方で木造部の素朴なアーチ窓の手法や漆喰装飾にはヴォーリーズのアマチュア時代の匂いが残されているとも言われている。

福島教会の竣工の翌月に京都丸太町教会が建っている。木造で外壁が明るいホワイト・グリーンに塗られた下見板張りの教会は北米コロニアル建築の明るい印象を与えるものである。正面に大きな妻壁を構え、左に塔を配する全体の構成は福島教会と共通している。そしてトリフォイル（三つ葉模様）のレリーフとクロスを図案化した妻飾りや素朴なアーチ窓などの部分のデザイン、塔の立面を分節する4本の水平帯の扱いは当時のヴォーリーズ建築に見られる特徴であった。福島教会は礼拝堂内を高い天井空間を奔放にデザインしていたのに対し、丸太町教会では袴腰付きの平天井を用いた静かな空間となっている<sup>17</sup>。

京都の中京区御幸町二条には日本基督教団京都御幸町教会という煉瓦造の礼拝堂がある。

通りに面して低い煉瓦塀を立て、その奥に煉瓦壁の美しい礼拝堂が立っている。礼拝堂脇

に続く北の庭には重厚な控え壁をもつ側壁が奥に20メートルほども続いている。ヴォーリーズによる煉瓦造は福島教会、関西学院神学館、御幸町教会と続いている。その後同志社の旧図書館や致遠館、東京の明治学院礼拝堂が建てられている。その中で御幸町教会の礼拝堂はヴォーリーズの初期作品の1つで尖頂アーチを連ねるゴシック様式を基調としたものである。それは正面妻壁のアーチ窓にある縦格子と曲線を組み合わせることでどこか京都の町家風を感じさせるものであった<sup>18</sup>。

筆者はヴォーリーズが設計した教会の1つである京都復活教会を訪れた。案内書によれば、

京都復活教会は1914（大正3）年に西陣・大宮元誓願寺上の地で「弘道館」として始まった。その後何カ所か場所を移し、1932（昭和7）年に北大路堀川角の現在地に土地を購入し、1930（昭和5）年頃から西陣で子供たちを対象に始めていた幼稚園を復活幼稚園として開園した。1935（昭和10）年には現在の建物が完成し本格的な宣教活動が開始された。礼拝堂は教会生活の中心で心の拠り所である。



図3 京都復活教会  
（京都復活教会・筆者撮影）



図4 京都復活教会の礼拝堂  
（京都復活教会・筆者撮影）

毎週日曜には礼拝が行われ、イースターやクリスマスも催される。他にも洗礼式・聖婚式・誕生感謝の祈り・葬式など、人がこの世に生を受けてから、天に召されるまでの様々な時に献げられる礼拝が行われる。当礼拝堂は2009（平成21）年5月、「市民が学ぶ文化財」に選定された<sup>19</sup>。

西洋建築の特徴である丸みのある尖塔アーチと曲線が用いられた装飾が教会風のイメージを醸しだし、外観と同様に内部も曲線が多い印象である。礼拝堂にはステンドグラスが多く使われており、赤や青の十字架のデザインが美しい。筆者が訪れた際にも夕陽が差し込み、神秘的な空間となった。祭壇上のステンドグラスにはイエスキリストの姿があり、天井は梁を見せる工法が用いられていた。梁にもアーチを組み合わせることで柔らかい印象を与えている。ヴォーリーズは教会のデザインや礼拝堂の装飾全てにおいて、彼の建築のモチーフである「美しく周囲と調和するような設計」を心掛けていたと考えられる。

さて、ヴォーリーズが日本における拠点とした近江八幡には、円熟期の駒井家住宅に類似する数多くの建造物が存在している。

近江八幡にはヴォーリーズによる近江兄弟社の建築、当時の近江兄弟社員の住宅が今も残されており、加えて郵便局や警察署の建物、数棟の住宅も現存している。そのうちの1つである旧忠田邸の建物は和式を融合した洋風住宅の代表である。かなりの敷地を有しており、玄関まで10数メートルはある径の脇に広い前庭を設け、その奥に40坪ほどの2階建て住宅である<sup>20</sup>。

忠田邸は大阪朝日新聞の重役であった忠田兵蔵氏の旧宅であり、1937（昭和12）年に建てられ、駒井家住宅が建てられてから10年ほど後にできた個人住宅である。駒井家住宅も旧忠田邸も建てられた時期が彼の円熟期にさしかかる頃であったためどちらも和と洋が融合した洋風住宅であり、従来通りの「周りの自然に溶け込むような住宅スタイル」であった。

玄関の設備は壁際に腰掛けとなる靴箱を置き、踏み込み段は5寸5分と極めて低く、自然にホールへと達するようになっている。脇にはディテールの美しい階段を設け、上部の高窓から穏やかな外光が射しこむように構成されている。間取りは南側の中央に煉瓦敷きの広いテラスと大きなマントルピースを配した15畳ほどの居間を設けている。また東には広い縁側をもつ6畳の和室が設けられた。その部屋は台所境にハッチが開かれ日本的な茶の間のように使われていた。さらに1940（昭和15）年には2間の座敷が増築された。西側には書斎と本格的な設備の暗室が配され趣味の場として使われた<sup>21</sup>。

駒井家住宅の設計においてヴォーリーズは趣味を楽しむ場所を造ることを大切にしており、旧忠田邸においてもそこに住む人々に合わせたデザインで設計されていることが考えられる。ただし、忠田邸では、ヴォーリーズのこだわった2階部分は主に和室となっており、そこに新たな視点が駒井家住宅に加えられたとみることもできよう。あるいは、忠田氏の意向を十分に反映した結果かも知れない。

#### 第四章 駒井家住宅設計に込められたもの

では、最後に駒井家住宅に設計者ヴォーリーズが込めた想いについてももう一度見ていくことにする。

駒井家住宅と、ヴォーリーズが手掛けたその他の建築物を比較して駒井家住宅ならではの特徴の1つ目に暖炉がないことが挙げられる。

備え付けられる暖炉は大きさ、材料、工法、色彩、意匠と多種多様で住む人間と同様にかげがえのないオリジナルのものでありながらデザイン性と実用性に富んだものである。ヴォーリーズは西洋の居間における暖炉は日本のお座敷における床の間と同じく、1年に3～4回しか焚かないが、暖炉がなくては家の釣り合いが取れず、何か物足りない感じがする。

### ヴォーリーズが手掛けた駒井家住宅の特性について

と述べている。また、先述の「居間」と「暖炉」を関連付けて、

ヴォーリーズは台所と寝室があれば家だが家とホームは異なり居間ができて初めてホームの資格になると考えていた。暖炉は暖房の器具という実用性を超えて、住む人々の心の置き場所となり人と人との精神的交流の拠り所となっている。暖炉は住宅だけではなく、学校の集会室や会議室、幼稚園の保育室にも備えられ、すべての建築がハウスを超えて、人と人が出合い交流するホームであるとした<sup>22</sup>。

今回取り上げている駒井家住宅には例外的に暖炉がない。その理由は質素な生活を好んでいた駒井卓博士の要望があったからだと言われている<sup>23</sup>。そこで冬には居間にだるまストーブを置いており、普段は暖炉を設置しない代わりとして、居間には明るい東側に固定されたソファがあり、南側のサンルームと合わせて自然光をふんだんに取り入れている。このようにすることで暖炉がなくても窓から入る光で温かさを感じながら過ごすことができたのである。他に静江夫人の和服での生活に合わせた要望に沿った場所として台所や和室が挙げられる。

すなわち、ヴォーリーズは、自らの建築理念は堅固に持ち合わせていながらも、建築主の要望は全面的に受け入れていたようなのである。先の忠田邸の2階和室も同様かと思われる事例である。

2つ目の特徴は、今度は逆に、ヴォーリーズの建築に対する理念が個人住宅のレベルでも十分に込められていることである。第二章でも述べたように、ヴォーリーズが来日してすぐに住み始めた家は2階建てではなく平屋建てだった。彼は日本では空気が悪く雑菌や埃が多い1階に子どもを寝かせているということに疑問を持った。また自身が持っていた本にカビが生えてしまい、日本の建築様式も、西洋と同様に2階建ての家にすることで子供の健康を守るべきとする考えを固くした。また部屋を用途ごとに分けるようにすることや、西洋式のように2階にトイレと洗面所を設置してより住みやすい家を実現しようとした。実際に駒井家住宅は2階建ての構造で2階に寝室や書斎、トイレ、洗面所が設置されている。

そして、重要なことは、ヴォーリーズ自身が幼い時から親しみ続けてきた音楽を生活の中に取り入れ、音楽と共に安らかな時間を過ごしてほしいという想いから、駒井家住宅にもピアノを設置したことである。これは駒井夫人の意向とも合致したゆえの実現であろうが、「居間」における新たな「日常」の創出こそが大きな特徴と言えるものである。

付け加えるならば、そこには実用性も兼ね備えており、駒井家住宅の紹介で取り上げた階段がその工夫の1つである。ヴォーリーズが設計する階段は緩やかに造られている。「緩やかな階段にするには大きな面積を必要とし、緩やかでも段数が多ければ能率的ではなくなる。そこで床と天井の寸法を小さくし、階高を低く抑え段数を少なくするよう工夫した。階段の工夫は駒井家住宅の他にも、大丸心齋橋店のX形交差階段にもみられる<sup>24</sup>とされるように、ヴォーリーズの設計からみえる建築は人々の生活への配慮が行き届いており、駒井家住宅においても駒井夫妻やお客様に対しての気遣いが階段をはじめ多く配されていることが分かる。

また西洋建築様式を基本としてヴォーリーズ建築の窓は縦長の造りになっている。駒井家住宅の窓も縦長にデザインされたものが多い。「それは太陽光を部屋の奥まで採り入れるため日照と通風の役割をする窓は住む人の健康を守る大事なものと考えた<sup>25</sup>結果である。ヴォーリーズの住宅設計は建物や家具だけではなく、建物の中から見える外の景色も建築作品の要素として常に考えられていたのではないかと推測できる。駒井家住宅からは、庭園や大文字山が見えるため家の中に居ても十分に自然を感じることができるのも1つの魅力といえる。

以上のような特徴から、駒井家住宅は、ヴォーリーズの建築に対する理念と駒井夫妻の希望が融合してできた家であると考えられる。ヴォーリーズが考える、全ての建物においてただ住むだけではなく、人と人が出合い、交流する場所であるという住居論は、自身も駒井家住宅を設計するにあたってヴォーリーズと駒井夫妻の交流にも当てはまるとしている。個人宅である駒井家住宅を設計するという事は、駒井夫妻との良好な関係の構築にも貢献したのではないだろうか。

## 引用及び参考文献

- 1 公益財団法人日本ナショナルトラスト「駒井家住宅 駒井卓・静江記念館」(リーフレット)
- 2 山形政昭『ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築－ミッション建築の精華』(2018年8月 創元社)
- 3 上掲2
- 4 川口仁志「W・M・ヴォーリズの見た日本の子どもと住まい」(『比較教育学研究』第19号東信堂 p.19 1993年所収)
- 5 山形政昭『ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築－ミッション建築の精華』(2018年8月 創元社)
- 6 公益財団法人日本ナショナルトラスト『駒井家住宅 駒井卓・静江記念館』(パンフレット)
- 7 公益財団法人日本ナショナルトラスト 駒井家住宅より
- 8 上掲2
- 9 齊藤紀子「W.M.ヴォーリズの設計した駒井家住宅をめぐる音楽－女学校出身者駒井静江(1890～1973)の音楽実践－」(『音楽学』第65巻2号 p.139-141 2019年所収)
- 10 公益財団法人日本ナショナルトラスト 前掲書 p.10
- 11 W.M.ヴォーリズ『吾家の設備』(2017年4月 創元社 p.126)
- 12 W.M.ヴォーリズ『吾家の設計』(2017年4月 創元社 p.60-7)
- 13 W.M.ヴォーリズ『吾家の設備』(2017年4月 創元社 p.177-8)
- 14 山形政昭 前掲書 p.300-2  
なお、本ページの括弧付き文章は本書からの引用である。
- 15 片岡れいこ『京都レトロモダン建築めぐり』(2021年4月 厚徳社 p.37)
- 16 KYOTO CITY GUIDE『Casa BRUTUS 特別編集京都シティガイド』(2021年9月 マガジンハウス p.170)
- 17 上掲2
- 18 上掲2
- 19 パンフレット「日本聖公会 京都復活教会」より
- 20 上掲2
- 21 上掲2
- 22 山形政昭『ヴォーリズ建築の100年恵の居場所をつくる』(2008年2月 創元社)
- 23 “京都 MUSEUM 紀行。第三回【駒井家住宅】” 京都で遊ぼう ART HP 2024年12月16日閲覧 [https://www.kyotodeasobo.com/art/static/column/museum\\_kikou/03\\_02.html](https://www.kyotodeasobo.com/art/static/column/museum_kikou/03_02.html)
- 24 上掲22
- 25 上掲22